

— 水 郷 回 想 —

保 立 俊 一

人力車が土浦の町の中での交通機関であった明治の頃、土浦は船を利用した交通の中心地でもあった。霞ヶ浦の汽船の歴史については、土浦市史の中でも確実な説明がなされていない。その歴史の実際を知ることが出来ないのであるが、私なりに考えを記してみる。

霞ヶ浦の水運については江戸時代高瀬舟によって盛んになりその記録が残されている。然し高瀬船から汽船に代った時のことは、はっきりした資料が無い。あいまいな説明で終わっている。明治14年に土浦魚会社が出来た時、銚子から鮮魚が運ばれるのに蒸気船が使われた。銚子の吉田鉄工所で作られた漁船のような船で運んできたと聞いている。後にその船に客も乗せるようになったのだという。

私の家で銚子行きの船の切符を取扱っていた。銚子と東京の間に通運丸が就航したのは明治10年頃のことである。通運丸が霞ヶ浦へ入って来たのはそれからしばらく後のことである。常磐線がまだ出来ないその頃は土浦から東京へ行くのに船便を利用したのである。

土浦から銚子行きの船に乗り佐原で銚子東京間の通運丸に乗り換えるのが普通であった。

その頃の交通機関にトテ馬車があった。豆腐屋が行商の時吹いた真鍮のラッパを吹いて走ったので、ラッパの音からトテ馬車といったのだが、ここに明治24年の乗合馬車広告というものがあるので記してみる。

土浦取手間往復乗合馬車広告

生等過ル日早船之広告仕候処続々御乗客御出荷ノ御負最ニ預リ恭ク奉謝候然ルニ今般尚ホ御便利ヲ相計リ当土浦ヨリ取手間往復乗合馬車ヲ相設ケ而シテ取手出帆ノ早船へ御乗込

ミ之時間ヲ以テ発車仕候間何卒御愛乗ノ程奉希上候也

明治二十四年五月二十一日開業 土浦ヨリ取手 土浦午前八時発車取手へ十一時着取手ヨリ午後二時出帆東京へ翌朝六時着ス取手午後二時発車土浦へ午後五時着ス

土浦ヨリ東京迄 金三拾五銭

土浦ヨリ取手迄 金二拾八銭

営業人 新治郡土浦田町 染谷 彦造

馬車乗客取扱荷物取扱所

同郡土浦中城町 保立 一郎

北相馬郡取手町 竹村清五郎

(原文のまま)

この広告にもあるとおり土浦から東京への船便、広告の中の早船は明治24年以前からあったのである。通運丸が霞ヶ浦へ入って来た時から私の家では乗船切符を売っていた。

そういうことで当時の交通機関として乗合馬車があった。土浦と筑波の間にも乗合馬車があって、私の家の前をラッパの音をひびかせて通っていたのをなつかしく思い出す。

筑波へ行っていた乗合馬車は、大正7年に筑波鉄道が出来てからしだいに鉄道に押されて乗客が減り大正10年頃にやめてしまった。

明治から大正時代の交通機関は馬車や人力車それと霞ヶ浦や川沿いの町との交通は船ということになるのだが、重い荷物を運搬するのに利用されたので、人はもっぱら歩いていたことが多かったのであろう。乗り物を利用するようになったのはずっと後のことで自動車が出来てからのことである。

土浦で自動車が営業として開始されたのは大正11年のことである。当時の土浦の財閥と

いわれる浅野弥右衛門、坂野五兵衛、海上勘四郎らが茨城自動車株式会社を設立、土浦と筑波間に乗合自動車を走らせたのがはじめである。料金五拾銭だったが当時はまだ珍しいだけで利用客も少なく一年たらずでやめてしまった。大正11年といえば霞ヶ浦航空隊が出来て、イギリス人の航空教官が自動車で町の中へ走って来ると、こども達は黒山のように集まって見物していた頃のことであり、町の中に自動車を見るのが珍しい頃のことであった。その頃町の中に自動車屋が出来はじめた。土浦商工会誌によると、大正11年アサヒ自動車商会が小城官一郎によって創立されたのをはじめとして、大正13年本橋自動車土浦営業所、大正15年、土浦自動車株式会社、大正15年霞自動車株式会社が創立されている。

その後個人営業の自動車屋が出来て昭和初期には自動車時代になるのであるが、当時の自動車は非常に粗末なものが多く現在では考えられない珍事が数多くあった。全部が外車であり、フォード、シボレー、まれにヴィックなどがあった。

バスの路線が出来たのも昭和初期である。バスといってもトラックの車台に箱を乗せた程度のものであり、まだバスという呼び名は無く、乗合自動車とよばれていた。乗合路線にも停留場の設置は無く何処でも手を揚げれば止って乗せ、又降ろしてくれるという、その点では今よりサービスがよかったのではないかと思う。道路も舗装してある処など無い時代で、雨上りなどは乗客が降りて車の後押しをすることも度々であった。(会員)

釣り人の目から見た霞ヶ浦

麓 尚 仁

「おはようございます。どうですか？ 何かでましたか」

「だめだね。あたりもありゃしないよ。ドックを改修する前はここでいい釣りしたね。ちょうど土浦駅の前の駐車場、あれが昔は浅い池のようになっていてねえ、こっちとつながっていて、ほら、この橋を境にしてこっちが深場になって、ヘラにやもってこいのばしょだったあ。」

「すると春の乗っ込みはいい釣りができたんでしょうねえ。」

「ああ、今は駐車場で埋め立てられっちゃったけど、あの浅場にはヨシやマコモ、なんて藻がたくさんはえていて、そこに、霞ヶ浦からいっせいにコイやヘラやマブナが産卵

しに乗っ込んできたさ。朝行くと藻ずらやマコモのきわでバシャバシャやって、ものすごかったんだから。水が白くなってね、今じゃ考えられないよ。四方八方護岸されちゃって、産卵する場所なんかありゃしない。これじゃあここに入ってくる魚もすくなくなるよ。あのころは40センチ級ヘラが入れ食いだったよ。そうそう、あのころはジャミでタナゴがいやになるほどでたさ。今じゃ釣るのもむずかしいや。」

「昔は、よかったんですねえ。」

「ああ。確かに昔は水際までいくのは大変で釣りのポイントは限られていたさ。でもヨシやマコモに囲まれて、広大な湖を前にしちゃあ、一日竿を振っても飽きなかったね。今

とはアジが違うさ。ヨシやマコモは昔に比べりゃ減ったね。ありゃ護岸ができて残っているもんも波でけずられちゃうんだ。そうすりゃ魚の産卵場所もなくなっちゃうべ。したら、護岸で釣りやすくなったって、魚がいなくなっちゃ話にならねえ。んだろ？」

「ええ、確かにそうですねえ。ところで、夏はあのアオコでもヘラはでるんですか？」

「ああ、でるでる。高浜入りの南っかわのハス田、アオコのどっぶんどっぶんしたなかの浅場でいい型のがでりゃ。でもおりゃやる気しねえな。アオコの中じゃ釣った気がしねえ。だいいちアジがねえだろ。」

「はあ……」

「最近俺のところへ水道のやつらがきて、水道ひけひけってうるせえんだ。したら、こんな水、だれがのめるかっていってやんだ。おりゃうめえ水で茶をのみてえんだ。だから40メートルも井戸を掘ったんだべ、おりゃいつもこうしておいかえしてやんだ。」

「でもこのアオコ、なんとかなんないんですかね？」

「簡単さ。あの水門あけちめえばいいんだ。住金ばかりいいおもいばかりさせておくことあねえよ。んだろ？ おれの知り合いの漁師の連中もみんないってらあ。一発できれいになるってな。」

「でも水門をあけると海水がはいってきますが？」

「最近の科学げぜつをもってせば簡単だっぺ。塩をぬくことくれえ。あんたら学生さんはそういうこと大学でおすわってんだっぺよ。」

「はあ……」

「でなけりゃ何の役にもたたねえんだろ？ん？ 今は昔と違ってなんでも水をつかいすぎるんだ。洗濯するにも水をじゃあじゃてれ流し。なんでもそうだ。したっけよごれた水も多くなんだ。それに霞ヶ浦タメ池だっぺ、

よごれるのも当然よ。」

「やはり、逆水門を開けないとだめなんですかねえ？」

「んんだ。さもなけりゃ湖のまわりに一周堀をほって全部の川をいったんとめんだ。その堀にヨシやマコモをたくさん植えてぐるぐるまわしながらきれいにするんだ。きれいになった水をポンプでくみだす。川の流れる量をはかってその分流しゃ問題なかつぱよ。つまらん水路をつくるよりゃよっぽどこっちのほうがいいべ。どうだ？ 大学の先生よりゃましなこというべ。？」

「おっしゃる通りです。」

「あああ、そろそろあがっかなあ。どっちみち水門はあけなきゃきれいにならねえよ、学生さん。」

「そうかもしれませんねえ……」

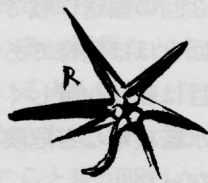
「最近の釣りやってる連中は釣りのつのもしらねえな。ゴミばかりちらかしやがって、まともなつりもしねえくせに、エサだって自分ちで調合すりゃビニールはでねえし、のみもんだっててめえんちで作ってけばやすあがりだべ？ それに最近はやりのブラックやってるガキは糸まですてていきやがる、話になんねえよ。あああ、疲れちったよ。今日はもうあがりだ。風呂でもはいて一杯やっか。」

「今日は本当にいろいろ聞かせて頂いてありがとうございます。」

「また来なよ。学生さん。今度はもっとおもしれえことかせてやらあ。」

「はい。それじゃお先に失礼します。」

(筑波大学生)



届かなかった稚魚たち



— 戦時下のソウギョ輸送 —

葉 梨 丈衛門

霞ヶ浦向きと、中国産の団頭魴養殖の話を読んだ。もう40年も昔になるが、やはり中国から“ソウギョ”“レンギョ”の稚魚が運ばれてきたことを知っている人はいるだろうか。汚濁の話と共に、汚れた水にも強い魚の代表として利用法などだけがとり上げられているが、戦争中この稚魚輸送作戦に関わった自分としては、名前をきく度いつも胸中ザワザワと風の立つ思いがする。このまま黙してとも思ったが、当時を知る人達も次々と亡くなり、戦後生活のあまりの様変わりの中で、かえってあの頃の事が鮮明さを増して自分の中に甦ることが多く、少しでも書き留めておきたいと考える様になった。

私は戦争中、茨城県霞ヶ浦・北浦水産振興所に勤務していた。食糧は日増しに少なくなくなり、太平洋からの漁獲も危険となる中で、県は食用魚の研究をうち出してきた。1～2年で大きなものは1メートル近くになるという中国産のソウギョに目をつけたわけである。

ソウギョは中国・江蘇省の2番目に大きな都市無錫の「太湖」に住む魚である。学者の研究によると太湖の水質が霞ヶ浦と非常に似かよっているということで、稚魚の養殖可能と判断されたわけである。

第1回の輸送作戦は、内地から直接船で渡ったと思うが(第1回の記録がない)、私が関わったのは第2回の輸送作戦であった。輸送の状況は第1回とほぼ同様であったと考えられる。第2回目は戦局が厳しくなり、東シナ海は米軍の潜水艦攻撃など危険な状態で陸路をとることになった。

昭和18年私達水産振興所から所長を含む5名、県庁職員1名が出発することになった。私達水産関係の5名は大きなリュックサックを背負って、土浦駅から列車に乗った。雨の降っている日で駅は応召兵でごったがえしていた。

戦局への漠然とした不安はもっていたものの、瀬戸内海に近づくにつれ列車の窓は全部覆われ外は全くみることができなかった。下関に着くと街中は暗く殺気立っている様で急に緊迫感につつまれた。仲間と町で食事をし、ほんの少し酒をくみかわしこれが最後かもという実感を持った。翌日、長い栈橋を無言のまま渡って関釜連絡船に乗り、韓国の釜山に着いた。暗闇の中で港に大きな高い山がのしかかっているような街であった。

釜山から北へ、大邱・太田・平壤・新義州更に鴨緑江を渡り、赤茶けた朝鮮半島から満州へと入った。唯々広い、まさに広野であった。年配の人は知っているであろう李香蘭の唄う“満州娘”などの流行った頃で、そんなロマンも吹っとんでしまうような窓外を流れる景色は広野ばかりであった。やがて奉天に着き、やっと人の暮しがみえてきた。ロバの様な小さな馬が歩いていく。人々は馬糞を拾って家家の壁にぶつけていた。乾燥させて燃料にするのである。「垂細垂号」の列車の旅は更に続く。奉天から熱河省の錦州を過ぎると広野に山がみえてきた。しばらく走り、山海関に停車した。ここで日本の通貨を両替するため駅に降りた。連なる山の尾根を万里の長城がはしっていた。北京・天津を径て津浦線で、

済南・徐州・パンプへ。そこで北支通貨を中支通貨に両替し、紙幣ばかりで財布に入りきれない程の量となった。更に進み浦口に着いた。揚子江の水が泥水となり勢いよく流れていた。対岸の町が南京である。南京から一路上海へ入りソウギョの勉強をすることになった。中国側の受入れ先は「中支水産公司」という機関であった。数日して蘇州をへて無錫へ入った。無錫は湖沼が密集している江南水郷地帯である。高い城壁に囲まれた古い町であった。稚魚の手配は全て中支水産会社がしてくれ船積みまでの面倒をみてくれることになり私達は上海へ戻った。上海では日本租界の“ヤンジッポ”という日本館に泊った。

数日の滞在後、船積みの準備も終り私達一行は上海から出発した。「上海丸」という貨客船であった。戦況がひどくなり日本へ引揚げる民間人が多数乗っていた。乗船は午後の2時頃であったと思うが船はなかなか動かない。当時米軍の潜水艦攻撃がはげしく大変危険な状態であった。やっと動き出して、揚子江の黄色の濁りが薄くなった頃、台湾沖で輸送船が3隻沈められたの情報で船内は緊張感でつままれた。いつのまにか輸送船が私達の船を伴走し、その囲りを駆逐艦がまわりながら護送してくれていた。星の美しい夜で、潜水艦攻撃を恐れて之字航行をしている航跡は夜光虫で光り例えようのない程きれいだった。

稚魚は甲板の舳先に直径2メートル、高さ2メートルの木の桶を4個用意しその中に入れてあった。体長3センチ程のものが1万匹位であったろうか。5人が交替で管理した。最初私達3人が救命胴衣をつけ、台にのぼり大きな木杓子のようなヘラで攪拌作業をするわけである。眠気に襲われ手が動かなくなると、稚魚達は酸素不足から鼻上げ現象をおこし口をパクパクはじめる。20才という若さで

あったが、慣れない中国の食事で、下痢続きで消耗している身には大変つらい仕事であった。それに加えて厳しい戦時下の緊張感とで交替して船室に戻っても身も心も休まるひまがない。最悪の時を予想して、あるもの全部を着てダルマの様になり、遭難時の食糧カット節を身につけ、その上に救命胴衣をつけ灯火管制で暗闇の中にじっとしているわけである。交替してほんのひとときたって、ものすごい大きな音と共にパッと電気がついた。なにが起こったのかわからない。船室から飛び出し甲板の桶めがけて駆け出した。仕事場が跡形もない。舳先がぼっきりと折れてしまっている。蒸気がすごい音をたててふき出している。交替した同僚 小松（石岡出身）宮本（土浦出身）の姿ももちろんみえなくなっている。船員がボートを降ろし始めた。パニック状態での作業で水面まで完全に届くボート、人を乗せたまま海中に突込んでしまうボートなど大変な状態となった。皆、人の頭の上からボートに乗る。自分もどうやらボートに移ることが出来た。うまく海面に着くよう祈っていた。甲板から赤ちゃんを毛布にくるんで投げてよこす若い女の人。下から皆で受けとめたのもつかの間、ボートは大きく揺らいで横倒しになり皆海の中へ放り出され、みるまに散り散りになった。自分もあっという間に流されて船から遠く離れていた。船は電気がついていて一瞬立った様になり沈んでいった。周りに様々なものが浮いていた。電柱の様な太くて長い角材が海中からすごい勢いでとび出してくる、水圧で沈む途中に色々なものとび出してきて危険な状態であった。大きな波頭に乗ると周りが見える。人の頭や荷物が浮かんでいる。郵便などを入れてある袋につかまっている人もいる、自分も流木につかまり波に動かされていた。どの位の時間だろうか、しらじらと夜が明けかかってもっとはっ

きり周りがみえてきた。軍艦がみえる、ボートが動いている。自分も運よくボートに救上げられた。水にふやけた手が死人の手のようにみえる。寒さと恐怖で震えが止まらない。駆逐艦の船上にどうやって上ったのかわからない、無我無中であった。救助されてくる人の中に見知った顔を捜しながら大砲の下で泣きながら震えていた。水兵が気付け用の酒を飲ませてくれた。そのうち稚魚の桶と共に海に投げ出された小松君が救い出されてきた。半死の状態で衛生兵の手当を受けたが“ダメダ”のひとつことであった。小便が出ないという。空の一斗缶をもらってきて何度かやらせようと試みたが駄目であった。数時間後に亡くなった。恥骨が折れて膀胱にささったらしいとの診断だった、18才の若さであった。全くどうしたらよいのか、茫然たる思いであった。やがて救出された人達は全員集められ、船室で一夜を明かした。人数がどの位いたかはっきり思い出せない。

翌朝、内地の緑の島影が見えた時の気持は生涯忘れることができない。

駆逐艦は軍港佐世保へ行くということであった。上海から船団を組んできた船が周りをまわっていた。自分達は貨客船に移されるという。いやだった。波が荒く足がすくんで身体が自由にならない。海上での船から船へは死と隣り合せである。やっとの思いで移り広い船室で羊羹をご馳走になった事など鮮かに思い出す。一夜明けて門司に着いた。小松君の遺体を済生回病院といったと思う、そこに預かってもらうことにし、私達は長い栈橋を憲兵に引率されある建物に収容された。それが何だったのかわからない。そこで同行した所長、瀬古沢（土浦出身）と県庁の職員と再会した。機密保持の話があり、外出禁止ということになった。衣料切符といくばくかの金銭をもらった。何をかうにも外に出られない。

とりあえず、小松君の義兄に状況を電報で知らせ遺体の引きとりに来てもらうことにした。数日して禁足が解け、所長の宮内（山口県出身）は郷里へ帰り、県庁の職員も瀬古沢さんも帰り、後仕末は若い自分に全部おしつけられた形となりやりきれない思いだった。しかし小松君の家族を思えばそんなことは考えていられない。数日かかって小松君の義兄がみえた。

やっと自分も帰れる身にはなったものの同行の宮本さんの行方がわからない。気がかりでしかたなかった。が、風呂敷包み1つを持って、何をつつんできたかほとんど記憶にない。草履を買って門司から列車に乗った。全部窓は覆われていて外の様子はわからない。見知った人もなく無言のまま、頭の中はからっぽで夢を見ている様であった。土浦駅に姉が迎えに来てくれていた。しかし何の感動もなかった。その時土浦駅で大きな列車事故のあった話を聞かされたことから、18年も終りの頃であったと思う。帰ってから暫くして県から支給されたイモ袋の様な布地の服を着て勤めに出ていった。まもなく宮本さんの消息がわかった。彼は台湾から帰ったという。彼の話から沈没の原因がわかった。私達は潜水艦か魚雷かと思っていたが、そうではなかった。私達の船は、上海沖で南方へ兵員を輸送中の数隻の船団の中に入り、そのうちの一隻と衝突したとのことであった。海に投げ出された彼は輸送船の方に救助され、そのまま台湾まで連れていかれてしまったわけである。もちろん上陸も出来ず船中に留められ便船を待って内地へ帰ってきたとのことである。戦場の唯中での恐怖をひきずって彼も私同様腑抜けの様な状態であった。ソウギョもレンギョも第2回輸送の稚魚は東シナ海にばらまかれてしまったわけである。その後、誰も養殖の話など言う人もなく、というより戦況がそ

れどころではなくなってきた。その後、私自身ひどい結核になり療養生活に入った。ほとんど寝たきりの状態の様な自分の所へ召集令状が来た。宇都宮の通信隊へ出頭せよとのことであったが、その日が丁度8月15日であった。

第1回の輸送作戦は昭和16年か17年ではなかったかと思う。資料らしいものは殆んど残っていないが、第1回の成長結果を見ることなく第2回が実施されたからである。戦後のことは私はわからない。私達の第2回の失敗

後終戦となり、数10年を経過し霞ヶ浦の汚染と共に、私達が苦勞して持込もうとした魚の名前が世間に出てきて私自身びっくりした。病気や汚染に強い、料理の工夫などテレビでも取上げられていたが、何故この魚が霞ヶ浦にいるのかを問う人は少ない。その陰に戦争と若い18才の命があったこと、その事実だけは風化させてはならないとの思いがいつも自分の中にある。

(編集部・注 葉梨さんは美浦村木原の旅館「川岸屋」のご主人です。

霞ヶ浦のさかな



保立俊

私は生物学者でも何でも無いので、一住民の他愛の無い話であると聞いてもらいたい。

今霞ヶ浦の魚類に異変がおこっている。

霞ヶ浦の水質、過栄養についてCOD値は横ばいの状態である。これは官民共に水質調査をしている人達の認めているところである。

然し魚類には変化がおこっている。

魚の種類は水質のバロメーターであるということが言われて久しい。鮎は清流の象徴であることは一般に誰でも知っている、だが自然のメカニズムは、人間の智恵では計り知れないものが多分にあるのだということを今更ながら感じさせるのが、今の霞ヶ浦の魚達のことである。

昨年11月26日に、出島村の農村環境改善セ

ンターで筑波大の研修会があった。その夜の交流会の席で、出島漁協の桜井謙治さんの意外な発言があった。

「今の霞ヶ浦の水は魚に最適である」

びっくりした私は其の話のつづきを聞いた。「62年度出島漁協の鯉の生産が非常にのびた、魚も変わってきた」というのである。

交流会には霞ヶ浦の鯉のあらいが出た。くさみの無いうまいあらいで学生達もよろこんで食べた「鯉ってこんなにうまいの」アオコの湖生産の鯉に対する感想である。

昭和48年が最悪の年、アオコの発生もピークであり、ワカサギ白魚は激減した。然し其の年、手長エビとゴロが大量に取れた。

水産業者も始末に困るほど取れた。ここま

では今までも報告があったので、汚水に強い魚種としてかたづけていたのだが、10年過ぎた今、魚類に変化がおこって来たと思う。

61年にワカサギ魚の好調が伝えられ、白魚もまあまあかえって来た。そして今年(63年)ヒガイが大量に釣れ出したのである。ヒガイは昭和初期に琵琶湖から移入した、きれいな水に適した魚種であるといわれてきた、48年汚濁の進んだ時、汽水性の魚類と共に、ヒガイも絶滅したと言われていた。それが湖のどこかでひっそりと体力の変化を待っていて出て来たとしか思えない。自然の生態型の奇蹟、人間の科学がどんなに進んでも出来ないこと、いわゆるバイオの世界の問題として考える他

は無いのであろうが、今霞ヶ浦の魚類をはじめ、すべての生態型に何かの変化がおこりつつあるのでは無いかと思う。

交流会で話されたことの中で、霞ヶ浦のうなぎの問題があり、戦時中名物魚になったカムルチーの話が出た。長い間霞ヶ浦の中で生きて来た桜井さんの話には、たしかな真実性があり、これから霞ヶ浦に何が起きるか非常に興味ある話になった。魚の話では無いが、湖水の価値感、即ち汚染の標準値にCODのみを使うのは適当で無いという意見なども出て、水問題に関係している我々の意識の再確認をせねばならない時が来るのでは無いかと思った。(会員)

サツマイモとハスのリン酸処理

ハス、サツマイモのリン酸処理については農家の収入にも影響するとして、当会でも頭を痛めて来た。出島などのレンコンとサツマイモの産地でかなり大ぴらに使っている“サニーゴールドA”“サニーゴールドB”など商品名の漂白剤はリン酸86%の内容である。霞ヶ浦富栄養化防止条例で、リンを含む洗剤までが禁止されている地域で、濃リン酸を使用することじたい困った問題で、対策が待たれていたが、今回厚生省で行政指導に乗り出すことになった。

厚生省は、この問題が3月と4月に国会で取り上げられたこともあって対策を検討していたが、「生鮮野菜として売られるものに対し、発色・漂白を目的として食品添加物を使うことは、現行の使用基準に反しない場合でも認めない。この目的で添加物を製造・販売することも認めない」という新方針を決定。都道府県に対し、添加物業界を指導するよう通知した。(61年5月)

ホタルを見ましたか

(土浦 1986・7月～8月)

ホタルの調査 ホタルを見たところ

殿里	2人
乙戸	2人
常名	2人
坂田	1人
蓮河原	1人
阿見町	1人
手野	1人
神立	7人
中村	2人
美浦村	1人
高津池	1人
田村	3人
飯田	5人
沖宿	4人
烏山花室川	2人
永国	2人

農業の空中散布以後見られない 4人
かくれたホタルの名所は天川から永国の間

◆ カッパ、井戸神様、水神様の調査 ◆

＜協力 土浦市老人クラブ連合会＞

土浦市老人クラブ連合会の協力で、このほど、カッパ伝説、井戸神様、水神様などの聞き取り調査を行った。

かっぱ祭りは残っていない。水神様もほとんど残っていないが、井戸神様は、まだ一部に残っていることがわかった。

この辺りでも昔はカッパという存在のユニークさ、水難よけの神様でもあり、イタズラ子でもあり、教師でもあったのがよくわかる。

- 川びたり カッパにのまれないように、風邪をひかないようにと、1月12日に餅をつき、そのうちの2個を川に流した。昭和34年まで（八郷町 上林）
- 川にあんをつけた餅を流して、カッパに川に引き込まれないようにお祈りした（八郷町）
- 部落に「三弘法水」という所が3ヶ所あり、日照りがあっても水が涸れないで、水の量が一定で、飲み水として、とても良い水である。餅をついて平らに丸め、川に流す川びたりが昭和25、6年頃まで残っていた。（八郷町園部）
- 旧9月28日は水神様の日で、神主がきておがみ、村中の人に甘酒の接待をする。（八郷町柿岡）
- 水分神の碑が建っている。一の沢の水神講12月の日曜に各戸で集まり、しめ縄をはってまつ。今でも続いている。（八郷町小幡一の沢）
- 旧10月10日に餅をつき、川に流して後をふ

りむかずに家に帰ってくる。川びたり餅とって、昭和17年頃まで残っていた。（八郷町瓦谷地）

- 正月行事として氏神様と一緒にしめ縄と供餅を井戸神様にもする。今でもやる。（八郷町）
- かっぱ餅、餅をつき川に流してカッパにささげた。昭和40年頃まで残っていた。（八郷町片野）
- かっぱ 昭和51年まで残っていた（八郷町守治念）
- かっぱ祭 昭和35年頃まで（八郷町下林）
- 井戸神様と水神様にごへいをそなえる。今でも（八郷町須釜）
- かっぱたりとって川の中にぼたもちを流した記憶がある。昭和32年頃まで（八郷町上曾）
- 保元年中、峰寺山の観音様を参詣された小栗判官郷の奥方が産気づき、村人が泉の水を飲ませたら安産だったと伝えられている。それで判官郷は、郷を「吉生」とつけた。正月には今でも新しい水神を迎えて、吉生の、北郷 榎戸坪 下山坪 田旧坪を迎え、お祝をする。（八郷町吉生）
- おしめり神事、晴天続きの時に雨が降った時など、言い継ぎをして仕事を休ませる。
- 川岸まで行くと、カッパに引かれると、親からいわれた。（土浦市永国）
- 出かわれとって奉公の人が暇の出る日、餅をつき、その餅を川に流して来る（土浦市永国）
- 東村 中村地区では川施餓鬼とって、お

産で亡くなった人の供養をした。

- 川岸までいくと、カッパに引かれると親から注意された。
- 東村 永国地区では、私共ちいさい頃、お産で亡くなった人達の供養をするために、川に竹を4本立て、髪の毛や、供物にしめ縄をまわし、ヒシヤクで水をかけた覚えがあります。(永国)
- 沖宿の水は、昭和40年頃まで噴水となって流出していました。現在は地下2メートル位になり、ポンプでくみあげています。
- 自分が18歳の頃きいた話、夏の日に、大人の人が霞ヶ浦に馬を洗いに行ったところ深みにはまって死んでしまった。7月7日だったので、七夕の日に霞ヶ浦に入ったからカッパに連れていかれたといった。その日を川びたりとして、あと連れていかれないように餅を食べさせた。他3名
- 川びたりは、水の事故がないように、戦前は沖宿 田村 手野 木田余では、旧暦の11月1日に、餅を二つ、川のくいの上にあげた。(沖宿 男 84才) 他4名
- 昭和15年まで漁業者達は霞ヶ浦の水を飲んでいた。
- 出島村加茂の松本という高台の土地なので井戸水は深井戸で水の質がよく、ここで育った人は長生きをするといひ伝えられている。
- カッパに引き込まれない様に、旧11月1日川びたりといって餅をついて、おそなえをつくり、水神様にあげた。漁師たちは船に餅をあげ、お祈りをした。
- 桜村栄地区では、桜川が大雨が降るごとに大水になり、おそろしかった。
- 今でもお正月に、井戸神様、水神様にお餅をそなえます。(沖宿 77才女)
- 現真壁町谷貝地区と、大和村前原地区の境界に莫太沼という沼があり、水深も2、3

mのところもあった。夏の頃、よく子供達は水遊びをしたが、親たちは、子供だけで泳ぎに行くとカッパに尻を抜かれるといて、子供だけの水泳を禁止した。昭和初期5人の水死者があり、今も沼の畔に碑が立っている。

- 稲作の水不足の時は、川から水をくみあげた。(永国 80才女)
- 川の辺りに遊んでいると、カッパに川の中に引込まれるということをきいていた。(永国) 他7名
- 旧12月1日 川の中に餅を落した。(永国)
- 12月1日、切り餅二個の間にあんをはさんで水底に沈めた。川びたり(永国 男72才)
- 大和村大国玉地区では子供が生れると、お七夜には隣近所を招待して赤飯を炊き、ささやかな涙肴を用意して、とり上げ婆さん(産婆)が産衣をかけた赤ん防を抱き、氏神様、便所、厩舎、井戸神様に、お膳にのせられた酒、米、塩などを、その家の祖父母または近所の人が捧げもってお詣りするならわしがあり、それが終ると、子供たちの仲間入りといひて駄菓子など配られたものでした。
- 年に一度は必ず井戸払いといひて、大体春先きでしたが、共同作業で井戸水を汲み干し、底まできれいに掃除をしたものでした。どこの家の井戸にも鮒や鯉などが3~4匹入っていて、それが汲み上げた桶の中に入ると、井戸様が上ったと、汲みおきのきれいな水に入れて、後日、井戸に戻したものです。その鮒などを井戸様の権化として大事に扱ったもので、死んでも食べるなど絶対しなかったものです。
- 部落の中央に用水溜池があり、その提上水神様といひて石の祠があった。日照り続きで作物に干害が出はじめると、雨乞いといひて、まず集会が招集され、そこで健脚屈

強な若者5～6人が選ばれる。この者たちが部落の代表となり、筑波連峰中の加波山神社（706m）本宮に迎えに行き、神官より竹筒に神水を貰って、それを持参、途中で休むと、その所に雨が降ってしまうという、休みなく一目算部落まで走って帰り、まず水神様に供えてから、部落民は炊き出しをしながら、大鼓、鐘を叩いて雨が降るまで続けたものでした。幾日か続けて雷雨でもあると、「オシメリオコト」といって一日、農事を休んで神に謝し、後作業に入ったものでした。

- ・旧暦12月1日は川びたりといって、餅をつき、それにあんをくるみ、川に投げ込んで溺死者（無縁佛）の霊を弔った。これは昭和初期まで続いていた。
- ・小川にオシッコをすると男子のチンポがはれる。
- ・鳥取県八頭郡では、井戸神様、水神様のお祭りとしては特にやらない。しかし、それぞれの家の井戸に草木を立て、朝方、これを拝む習慣があった。
- ・終戦まで続いた行事で「出かわれ」といって、奉公に出ている人が、暇の出る日で、餅をついて祝う。その餅を川に流してくる。（永国）
- ・川施餓鬼をして、お産で亡くなった人の供養をした。
- ・お盆には川に入るな
- ・井戸をのぞくと、子供は井戸神様に手をひっぱられる。他2名
- ・井戸神様、正月飾りと節分のお払いは、今でも続いている。（飯田 82才女）他2名
- ・川びたりは昭和20年まで、旧暦11月1日に、川に餅を2個流した（飯田） 他4名
- ・干ばつの時、雷神様に雨乞いの祈りを行った。

- ・佐の子万蔵寺にカッパの手があり、それを取り出せば大洪水になる。他5名
- ・節分の福豆は、井戸の中に三粒入れる（飯田）
- ・井戸の近くで小便をするな
- ・いうことをきかないと、カッパにつかまる
- ・かびたり餅は、昭和10年までのこっていた（飯田）他3名
- ・昔は、大雨が降るたびに洪水になった。（飯田）
- ・水遊びに行くと、早く帰らないとカッパに引込まれるといわれた。
- ・川に汚いものを流すと、水神様の怒りはこわい。（宮崎県小林）
- ・カッパは、春の彼岸に川に来て、秋の彼岸には山に入る。（宮崎県小林）
- ・カッパ（ガラッパ）は相撲が大好きだ、けれど相手になるな（宮崎県小林）
- ・4月になると農家の人々は、水源地に神官を呼んでノリトを捧げ、田植時期に水不足のない様に祈った。（宮崎県小林）
- ・カラスが高い所に巣を造ると、洪水になる。
- ・川びたりは、あんころ餅を川に投げ、カッパに上げた。他3名
- ・川びたり餅は昭和16年まで残っていた。（飯田 73才男）
- ・井戸神様をきれいにしないとバチが当る。
- ・悪い事をする、カッパにつかまる。
- ・田村の弁天様のお使いの蛇は、白い蛇だということです。大正の頃のことです。田村の弁天様の真ん前で砂利取り船が、ガラガラ操業しておりました。するとどうでしょう。その夜、真夜中、砂利取り船は、水中深く沈められてしまったのでした。真ん前で砂利取りをしていたから罰が当たったんだ。人々はそう思っておりました。なんと沈んだ船の煙突のてっぺんには、白い蛇がトグロを巻いていたということです。（田